

廣 告  
料 場 所 指 定 十 錢 增  
五 號 十 四 字 一 行 廿 錢

新濟城報

|             |       |         |        |
|-------------|-------|---------|--------|
| 發行日         | 日五廿   | 日五十     | 日五     |
| 編輯兼<br>印刷   | 雄     | 昌       | 木 鈴    |
| 福島縣石城郡平町五十丁 | 丁五十   | 町平      | 郡城石縣島福 |
| 發行所         | 地番二廿目 | 磐城經濟新報社 |        |

生ひる墓場より

生ひの光より

默鐘生

遠い昔孔子は『刑罰有害論』を説いて人間が人間を審判することの不可なることを論じた、僕は一年の間暗い息詰るやうな獄中のドン底生活を續けて、孔子ならすとも『刑罰有害論』を抱懷して行刑の如何に不完不備なることを痛感したこともであらう、獄中生活の一切が如何に加辱的であるか、そして加辱的なるが故に囚徒が意識的にも無意識的にも、自棄となりヒチクレ者となり、憂鬱となり、活力性を失つた非社會的人物に墮して行く事實を目の當りに觀て深く稽へさせられるものがある。

要路者が刑罰の有害なることを信じてゐるかどうかは知らぬが、行刑の不備不完は如何に囚人教化の上に影響を及ぼして行くかといふことを深くそして眞劔に考へてゐることは事實であらう、明るい行刑、行刑の合理化を提唱して行刑の改善に腐心してゐるか、知ることが出来る、一部分の改善は出來ても全体的の改善が斷行されねば常に當路者が提唱してゐる『明るい行刑』『行刑の合理化』なるものは其影だに表象されてこないのみならず寧ろ囚人の不満と反抗心を激成して行くばかりである。

行刑の實體が社會人をつくり、歪曲した性格を矯正する一つの教化機關だと見るならば現在の姿の儘では何等の價值のないものであるばかりでなく却つて非社會人、惡化人、赤化人を溫醸してゆくであらう、ことを考へずには居られない。然し一面に於て僕個人にとつては（一切は加辱的にもせよ）一年間の獄中生活はよき體驗であつた。このよき體驗はやがて僕の内面生活、社會生活、家庭生活の基礎となつて過去の姿はいみじくも崩壊され其廢墟の上に新しい人生觀と世界觀とが打ち樹てられ、培れてゆくであらう、然しそれは體驗を體驗としてかき抱いてゐるだけでは何んにもならぬ、そのよき體驗を清算し處理して行かねばならぬ死して生きるの途だ再現の價值と再生の歡喜である其處に體驗の清算と統制と處理との一途が開かれて行くであらう。

僕は暗い生ける墓場から放り出されて光耀たる世界に其一步を踏んだとき太陽は輝きをもつてゐた微かにゆらぐ若葉にも再生の光耀があつた、ドツしりと其尻を落ち着かしてゐる山々も微かに動いてゐる歡喜があつたそして今僕はジツとしつて過去の姿と現在の姿とを凝視してゐる、元より思索的な瞑想的な世界を彷徨してゐた僕は現在更に深い瞑想に落ちてゐるこの靜觀、瞑想、が體驗を清算する下準備となり處理されてゆく醗酵素となるであらう。

僕はこのよき體驗を何者よりも信頼を持つ。そしてこの體驗を靜觀と握手する  
とき其處には動着せざる意志、決定、區別觀、判斷が明確に見究める事が出来る  
僕が生ける墓場から一步再生の世界に放り出たとき僕の周圍に渦を卷いたものは  
家庭の世評である、この世評なるものには一本の針が含んでゐた。そしてよき體  
驗と靜觀とは世評なるものを見ずして事實を見ようとした、影陰を追はずして具  
像實體を把握しやうとした、結局所謂家庭の世評なるものは單に世評にして眞個  
の姿を見究めることができる。過去に於ける僕は世評と云ふものに動かさるゝ輕  
い不決定の意志を多分にもつてゐた、今この尊き體驗とそしてこの體驗の伴侶で  
ある靜觀は、動かさる意志と眞個の姿を見究めねば承知できぬ強さが培養されて  
きてゐる。

僕は生きる爲めに死んだ。清算されやうとする體驗はこれからだが爲めには寡黙な僕は更に寡黙となるかも知れぬ而して死の恐怖を常に抱いてゐた僕は完全に離脱されて行く然しこれは軽い諦観だとばかり言はれない、僕は過去に於て『死にたくない』といふ觀念がまづはつてゐた現在僕は『いつ死んでもいい』といふ觀念が樹でられてゐる。旌旗動かす、陣聲靜かなり僕はこうして闘つて行くそしてこの決定と革新された内面的礎石を踏んで前進し恩義に酬えて行くであらう。

無産労働組合黨 早わかり

はし  
がき

無產政黨や労働組合が常用とする言葉は、一般の人達にまつて難解であり、この方面の文獻に親しまうさしてもその理解に苦しまゝ爲讀書半ばにして、その吟讀を放棄してしまふ人が隨分あるように思はれる。編輯者はこの點に心を配り出来るだけ、通俗的に、平面的に判り易く筆を進める積りである。諸者にまつて裨益あらば編輯者の次幸とする處である。

我國無產政黨の生ひ  
立ち

日本の資本主義社會は大に大衆の普選運動は廣汎に正九年に於て、大恐慌に見起されたのである。

大正十三年六月二十八日

戰が終りを告げて、無計劃に生産を膨脹させた事や戦争をやめた各列強國が、講和が終ると直ちに生産に取りかかり、戦争中日本や米國の様に直接の交戦をして居らなかつた國から市場を奪ひ返すために、彼等の直ま

無産階級眉氣の學者、闘士、勞働者の諸君によつて

**政治研究會**といふ團體が創立された。これが今日、我邦の數多くある無産政黨の母体とても稱すべきものである。

で生産品の亂賣をやつた爲に、日本生産品の賣行きが會つてない不振状態に陥つたこと等にも主なる原因が

社民黨首安部磯雄 大衆黨首廣生久 勞農黨首大山郁夫等を初め今日凡ゆる無產政黨に於て中心人物になつてゐる者は、大抵政治研究會の幹部であつた。

おつたのである。  
そしてこの金融、經濟の  
磐城地方に於ては右の支部が組  
織されて居り、山代吉宗君等が中  
心となつて活動せられてゐる。

恐慌は、労働者を工場から  
プツタ切つて追拂ひ、或ひ  
は労働賃銀を小ビドク値下  
小にたつて支配勢力を相當あつた  
燭マルトモ書店の柴田徳治氏の自  
宅に磐城支部の集會場所であつた  
さいふこも記しておく（續く）

し、而かも勞働時間を長くして、資本家の利益率の低下を勞働者をやすく使役し

獄中生活の著述出版

うとしたのである。

而しいくら温順な羊でも

全線は鮮血に濡れたり』を

鈴木默鐘氏は一年間の獄中

生活の感想を収録し『彼の

搾取する事によつて満ち

獄中生活の

著述

鈴木默鐘氏は一年間の獄中生活の感想を収録し『彼の全線は鮮血に濡れたり』を出版すべく目下執筆中。

大和田印刷所

平南町 電話四六番

祝復活一周年

(三の其)

(順不同)

|         |        |      |      |      |      |      |       |      |     |      |      |       |       |      |          |          |         |          |        |       |             |              |          |          |        |       |       |
|---------|--------|------|------|------|------|------|-------|------|-----|------|------|-------|-------|------|----------|----------|---------|----------|--------|-------|-------------|--------------|----------|----------|--------|-------|-------|
| 石城郡町村長會 | 石城銀銀行組 | 伊藤儀七 | 加藤丈夫 | 齋藤英三 | 小野常治 | 石島德長 | 松本金市郎 | 諸橋國松 | 檜山謙 | 清野千ヨ | 山崎傳重 | 松崎長三郎 | 多田笑次郎 | 瀧川兼寛 | 豐岡村長志賀兼吉 | 同助役鈴木藤治郎 | 收入役鈴木清利 | 書記山野邊茂五郎 | 同鈴木幸太郎 | 同菊地晴雄 | 同豐岡小學校長作山一枝 | 同豐岡漁業組合長馬目常吉 | 豐岡大敷網事務所 | 旅館主遠藤只之助 | 小名濱鈴木榮 | 町長鈴木保 | 同助役高木 |
|---------|--------|------|------|------|------|------|-------|------|-----|------|------|-------|-------|------|----------|----------|---------|----------|--------|-------|-------------|--------------|----------|----------|--------|-------|-------|

疾、蓄膿症、胃腸病、婦  
病、花柳病、皮膚病、其  
感謝、其態度、言葉の  
裡に感じられる。



平町六番地  
平警察署ヨリ